研究課題名	COVID-19の流行が小児急性疾患発症へ与える影響の検討
研究機関名	武蔵野赤十字病院
研究責任者	所属　小児科　　氏名　長澤　正之
研究期間	臨床研究倫理審査委員会承認後　～　2023年6月
研究の意義・目的	小児急性疾患の中には、病原体感染を契機として発症するとされているものが多く存在します。しかし、これらの疾患の中には、感染症との関連性が十分には明らかになっていないものがあります。例えば、川崎病はA群β溶連菌、インフルエンザウイルス、アデノウイルスなどの病原体が(1-6)、またIgA血管炎もA群β溶連菌、インフルエンザウイルス、ヒトパルボウイルスB19などの病原体(7-11)が発症に関連している可能性を指摘されていますが、実際にはこれらの病原体がすべての症例で同定されるわけではありません。 2020年から始まった世界的なCOVID-19のパンデミック以降、我が国において感染症の疫学が大きく変化しました。感染予防策の強化といった生活様式の変化によるものと考えられる、COVID-19以外の全体的な感染症発症率の低下もその一つです。このような状況の中で、感染症との関連性が指摘されている小児急性疾患の最近の疫学や臨床像がどのように変化したかを検討する事で、これら小児急性疾患の病態生理の一端を明らかにすることができると考えます。 本研究では、COVID-19の世界的パンデミック以降、小児急性疾患の疫学、経過、重症度、治療に対する反応性、予後がパンデミック以前と比較してどのように変化したかを明らかにします。
研究の方法 (対象期間含む)	方法:後ろ向き調査観察研究 対象期間・対象・調査項目:2012年1月から2022年12月の期間に、小児急性疾患の診断で当院に入院した患者および外来受診した患者を対象とします。小児急性疾患としては、主に川崎病およびIgA血管炎の患者を対象とします。該当患者について電子カルテ情報を検討し、診断の妥当性を評価し、最終的な対象患者を抽出します。 これらの患者について臨床情報を取得し、疾患の疫学、経過、重症度、治療に対する反応性、予後などについて、どのように変化したかを解析します。
①試料・情報の利用目的及び利用方法（匿名加工する場合や他機関へ提供される場合はその方法含む） ②利用し、又は提供する試料・情報の項目 ③利用する者の範囲 ④試料・情報の管理について責任を有する者の氏名又は名称	①後ろ向き調査観察研究であり、電子カルテや臨床検査データベースより情報を収集し統計学的解析を行います ②調査項目： ・性別、入院年月日、入院時の年齢、外来患者については外来受診年月日および受診時の年齢 ・臨床経過：現病歴、既往歴、周産期歴、発達歴、家族歴、薬剤服用歴、アレルギー、予防接種歴 ・診断に関わる身体所見 ・診断に関わる臨床検査結果：血液検査、画像検査、尿検査、髄液検査、細菌培養検査、病原体迅速抗原検査（Flu, AdV, RSV, hMPV, GAS）、FARP検査 ③小児科：長澤正之、中川竜一、岡田麻理、横山はるな、宇田川智弘、下山輝義、橋本小百合、大柴晃洋 ④小児科 長澤　正之
問合せ先	当研究に自分の情報利用を停止する場合等のお問合わせ 〒180-8610　東京都武蔵野市境南町1-26-1 武蔵野赤十字病院 所属　小児科　　氏名　長澤　正之 TEL：0422-32-3111（代表）6812（事務局内線）　FAX：0422-32-3525